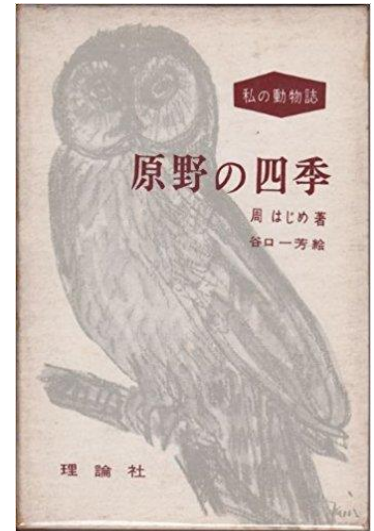
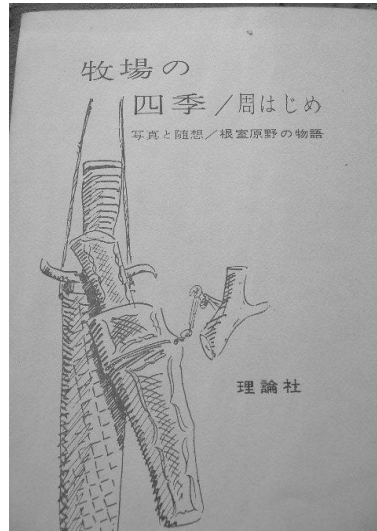


周はじめ著『牧場の四季』、『原野の四季』

北で育った人は別にして、誰でも若き頃に一度や二度は「北」への指向やノスタルジーを掻き立てられた経験があるのではなかろうか。「都ぞ弥生」や「北帰行」などの歌が若者を魅了したのもこの願れであろう。瀬戸内海沿岸で育った私は、社会に出るまで大阪から東には行ったこともなく、まして北海道などは僅かに新聞記事が何かでたまに目にするだけの遠い存在であった。その頃家にはテレビなどもなく、北海道のイメージといえば写



真集で見た広大な原野の風景や、本か何かで読んだ入植者の開拓譚、クラーク博士の「ボーイズ ビー アンビシャス」くらいしか知らなかったが、それ故に何か彼の地は開拓精神やロマンが満ち満ちている希望の大地のように感じられたものであった。山奥の田舎の高校でも毎年1人くらいは北大に進学する生徒がいて、羨ましくてならなかった。水呑み百姓の倅には、左様なアタマもゼニも無かった。

40年程前、就職して下宿していた阿佐ヶ谷駅前の古本屋で何気なく手にしたのがこの本であった。挿入されていた風景や動物のモノクロの写真も遙か北の大地の詩情をくすぐるものがあつたが、目次を見て益々気に入った。「森に消えた男」、「カムイの呼び声」、「牧場のスケッチ」とある。何やら神秘的で心が動かされるのではないか。著者は鳥や動物の生態写真を撮るために何回か根室原野に通い詰め、その時に聞いた開拓古老の話や、自分が見た根室原野の情景や動物の暮し振りを織り込みながら、一編の心象風景を物しているのだが、そのストーリー展開が飽きさせない。特に、風蓮湖辺りに棲息し、原生林の神コタンクルカムイと呼ばれた巨大なシマフクロウが開墾によって森を追われ、人家の近くに出没して家禽を襲うようになってから、仕掛けられた罠に捕まって、やがて絶命するまでの何日間かを、与えられた餌を拒絶して超然と威厳に満ちて死んでいったというくだりは、著者の野生動物に寄せる思いが伝わってきて感動的である。以上が『牧場の四季』。

もう一つの方の『原野の四季は』、副題にもあるように「私の動物誌」となっていて、根室原野に2年間程住み着いていた折に、ランプの下でせつせと知人に便りを書き送った内の二十数通の清書前の書きなぐりを纏めたというのがこの本である。全て、原野に住んでいる動物や鳥達と開拓者の人間との触れ合いを描いたものである。

この本に触発されて、同じ著者の本や同じく北海道の自然や暮しを描いた更科源蔵や坂本直行の本も読んだ。北海道には出張では何回も行ったが、札幌日帰りかせいぜいススキ野の赤提灯を楽しんだだけ。若い時分には北海道支店に転勤にならないかと淡い夢を期待してみたのであるが、結果は大阪や鹿児島に飛ばされたりしながら定年になってしまった。

現在の北海道の原野がどのようなになっているかは知らないが、或いは、この本に書かれた40年以上も前の夢幻(?)に私の「北」を封じ込めておいた方が良いのかも知れない。

『牧場の四季4』 1961年 理論社刊、 『原野の四季』 1958年 理論社刊。

(2005年4月 記)